

## 満洲国移民の軌跡(四)

### 敗戦前後、満洲で嫁ぎ先の家族の

### ほとんどを失った山際さんの話。

齊藤さんら、五福堂本部へ  
齊藤さんたちが青草のおい  
茂る湿地帯を越え、ようやく  
五福堂本部にたどりついたの  
は夕暮れだった。

小学校の教室が、中浦原部  
落の人たちの宿舎となった。  
やがて、他の部落からも次々  
と集結してきて、周辺は避難  
者でふくれあがった。濡れた  
着物を乾かす場所もなく、あ  
たりは炊事の準備でこつた返  
した。

やがて、通北駅前ソ連兵  
が駐屯したことにより、治安  
がようやく維持されるように  
なった。「今日までの命か」と  
何度か思われた襲撃の恐ろし  
さから救われた、と思ってい  
たところへこんな事件が起こ  
った。

ある夜、酒に酔ったソ連兵  
が五福堂の女子挺身隊の娘さ  
んを銃で射殺して、駅前事務  
所へさらっていったのである  
。こうした事件が何度か起  
きた。そのため、本部では、  
部落にソ連兵に「慰安婦(若  
い娘)」を割り当てるよりほか

なかった。こうした娘たちが  
身を投げ出したことで、多く  
の婦人、母親たちがソ連兵の  
横暴から身を守ることができ  
たのである。

もう一つの軌跡  
同じ北満の地へ開拓に行っ  
た人々の中にはもっと悲惨な  
目にあつた者もいた。

黒埼町の中でも、木場出身  
の山際由太郎さん一家がそう  
した目にあつたのである。  
山際由太郎さん(屋号三三七)  
が妻子を残し、第七次清和  
湯村開拓団の補助員として、  
ソ満国境に近い東安省虎林県  
に入植したのは、昭和十四年  
四月のことだった。

この開拓団は上越方面の出  
身者が多く、中には五福堂新  
潟村の団員と親戚関係の人も  
何人かいた。  
入植した場所は、ソ満国境  
からわずか三十キロくらいし  
か離れていず、夜にはソ連の  
民家の明りが見えるほどだっ  
たという。  
入植して六か月、由太郎さ  
んは永住することを決意し、

同年十月に妻や子供ら家族全  
員で満洲に渡った。当時、由  
太郎さんは三十七歳の働き盛  
り。家族は妻テフ(三十歳)  
長男由衛(十八歳)次男由雄  
(十六歳)長女ミサオ(十四  
歳)三男由光(十歳)四男竹  
男(八歳)の七人だった。

五福堂開拓団と同じく、太  
平洋戦争の始まる昭和十八年  
の暮れころまで、ここも平和  
な暮らしが続いた。  
昭和十九年の暮れ、由太郎  
さんは二十四歳になる長男由  
衛の嫁捜しを親戚に依頼した。  
そこで、当時の中野小屋村大  
友の小竹巳三郎さんの娘とし  
さん(当時二十二歳)との話  
が進められた。

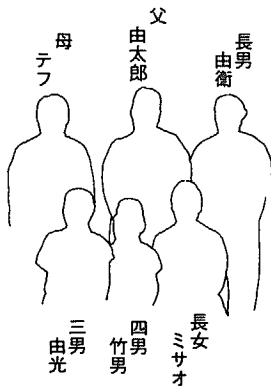
二十年三月、由衛さんは花  
嫁を迎えるため、帰郷した。  
そして、四月二十九日に、親  
戚の家で時節柄さやかな結  
婚式が行われた。  
満洲での春作業が気がかり  
な由衛さんは、五月に入ると  
すぐ新潟港に満洲への連絡船  
の出航予定を問い合わせたが、  
客船の出航はいつになるかわ

からない、とのことだった。  
そこで事情を話し、満洲行  
きの貨物船に乗っていくこと  
にした。  
船は満洲へ着くまでに何度  
も停船した。水中に布設され  
ているソ連の機雷を避けるた  
めだった。このころ、日本は  
すでに四囲の制海権を失って  
いたのである。

五月半ばを過ぎて、由衛さ  
ん夫婦はようやく虎林の清和  
開拓団に着いた。  
しかし、としさんととつて  
楽しい結婚生活は短かった。

満洲に渡ってきて二か月後の  
七月二十四日には、夫の由衛  
さんが現地召集されてしまっ  
たのである。(次男由雄さん  
は由衛さんより先に召集され  
ていた)そして、夫の出征後、  
わずか十二、三日で起るソ  
連軍の国境侵犯によって、虎  
林の清和開拓団はその地を追  
われ、地獄のような逃避行が  
始まったのである。

虎林から脱出する  
昭和二十年八月九日未明、  
ソ連機の虎林地域空爆とソ連  
兵による国境侵犯が始まると、  
何もう知らない子供たちは、  
車の上で無心に歌などを歌っ  
てはしゃいでいる。  
山に入ると道は次第に険し  
くなり、雨が強く降り始めた。  
だれもがずぶ濡れになった。  
早くも夕闇が迫ってきた。  
日が暮れると、牛馬車隊は  
前進できず、子供は濡れた着  
物のまま、眠りだす。雨はま  
すます激しくなった。  
八月初旬というのに、雨は  
体が震えるほど冷たかった。  
夜が明けると、なんとなく  
馬車が動き出す。寒くて歩か  
ずにはいられないのだ。  
そのうち、だれが言うとも  
なく「虎林の街にソ連の戦車  
が来たそう」ということが  
伝えられた。もつと急がなけ  
ればと、牛馬の足を一段と速  
くなる。我々の後ろからソ連  
の戦車が追ってくるぞ」とい



昭和16年ころの山際由太郎さん一家の写真(次男由雄は、撮影された後、仕事に出ている)



「宝清には日本軍の軍隊が  
いる」、それに合流しようとい  
うのが、団長をはじめ幹部の  
人たちの考えだった。  
夜になつてもまだ宝清に着  
かなかつた。夜中の十二時を  
過ぎるころまで進み、宝清だ  
ぞ」という声がそここで起  
こつた。  
しかし、目の前の宝清の街  
は、明り一つなく人が入って  
いくのを拒むように暗闇の中  
に沈んでいた。  
突然、道路の両側から二発  
の銃声が起こり、それを合図  
に門内から一斉射撃が始ま  
った。そこに待ち構えていたの  
は日本軍ではなく、反乱軍、  
満軍の一隊だった。  
由太郎さん一家は牛車のため  
、馬車隊より一足遅れていた。  
幸運にも攻撃を受けず、  
異変を知ると、直ちに後続の  
人たちとともに車や積み荷の  
すべてを捨てて、身一つでそ  
の場を逃れた。  
山中に退避しようとしたと  
き、さつきまでいた同僚の子  
供がひとり行方不明になった。  
由太郎さんはその子の親とい  
つしよに捜しに出て、そのま  
ま帰ってこなかった。  
父のもどらないのを心配し  
て、三男の由光はどうしても  
父を捜しに行くと言つて、一  
人で出かけたが、こちらもと  
うとうもどらなかつた。

こうして山際は宝清郊外  
で、父と三男由光の二人を失  
つたのである。くしくも八月  
の十三日、お盆の日だった。  
後に由太郎さんの死亡が確  
認された。由太郎四十三歳、  
由光十六歳

佐渡開拓団へ逃げ込む  
残されたテフ、とし、ミサ  
オ、竹男の四人は清和の人た  
ちや宝清で合流した人たちと  
いつしよに、また山中をさま  
よい歩き、野宿を重ねて、八  
月十六日ころ、川を渡つて勃  
利地区の大東開拓団に入った。  
この時、大東開拓団に集結し  
た日本人は約二千五百人とい  
われている。

八月十八日朝、大東を出発  
した。夜、湿地帯で道に迷い、  
八月十九日朝三時ころ、佐渡  
開拓団に到着した。快晴、半  
日休養し、にんじん、とうき  
び、じゃがいもを腹一杯食べ  
ることができた。

八月二十一日、佐渡開拓団  
を出発し、羅圈河開拓団を過  
ぎたところ、匪襲を受け、北  
の山へ逃げた。二十二日、ぶ  
らぶらあてもなく山中で道に  
迷う。二十三日、夕暮れ、山  
の上から佐渡開拓団が見えた  
ので下山し、宿泊。二十四日  
午後、解団式をして、各自歩  
ける者は脱出せよ、と決めら  
れた。二十六日、脱出組の七  
十人が出発、残った人々の中

に山際家の四人がいた。  
その日の夕方、ソ連軍のト  
ラック三台が白旗を掲げてや  
つてきた。それを日本人青年  
たちが襲い、焼き打ちにして  
しまった。

佐渡開拓団、全滅  
二十七日夕方、ソ連軍のト  
ラック部隊約三百人が攻撃を  
しかけてきた。迫撃砲、機関  
銃、自動小銃、手榴弾など圧  
倒的な重火器の攻撃に対し、  
佐渡開拓団一千五百人のうち、  
大半が非戦闘員の婦女子で、  
しかも武器もわずかな小銃し  
かなか、勝敗は初めから明ら  
かであった。抵抗を続ける隊  
員たちも次々と射殺された。

山際家の四男竹男は、家族  
といつしよに物影に隠れてい  
たが、流れ弾を胸に受け即死  
した。まだ十四歳だった。  
長女ミサオも全身に無数の  
銃弾を受け、瀕死の重傷を負  
い、母テフさんもかなりの深  
手を負っていたが、としさん  
のみ、幸運にも一発の銃弾が  
足のかかとのあたりをかすめ  
ただけの軽傷だった。

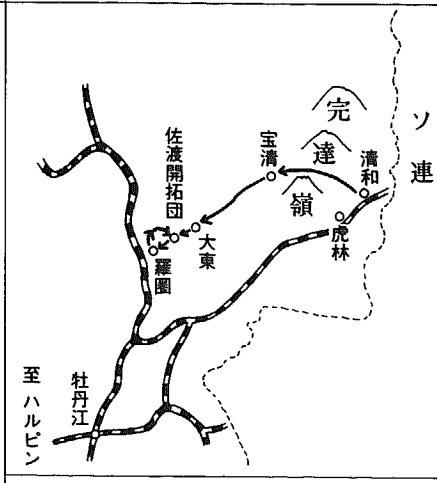
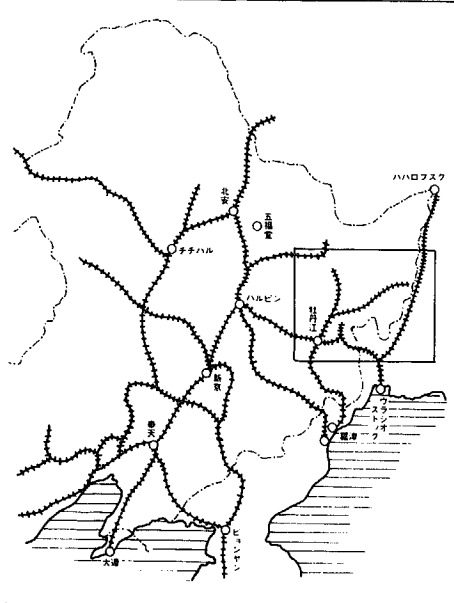
抵抗のなくなった部落に入  
つてきたソ連兵は、傷つた  
者を外の草原に並べせ、傷つ  
いていない者は家の中に入れ  
られた。どうするのかと思っ  
たら、まず家の中の人たちに  
手榴弾を何発も投げ入れて殺  
傷すると、外に並べさせた負傷

者にも手榴弾を投げたという。  
無傷の者として、姉やミサ  
オと別に家の中に入れられた  
としさんは、一番後ろの方に  
並んでいたが、手榴弾で傷つ  
き倒れかかってきた人の下敷  
きになり、死んだまねをして  
助かった。

ソ連兵の引きあげた後の開  
拓団の中は、重傷を負った人  
たちの断末魔のうめき声で、  
まさに地獄の様相となった。  
としさんはびつこを引きな  
がら、姉とミサオを探した。  
ミサオを見つけた時、ミサ  
オは苦しい息の下から、「あん  
にやに、私がこんなにして死  
んだとつたえてくれ」という  
言葉を残して死んだという。  
十九歳だった。

テフさんは「どうせ私は何  
う助からない体、お前だけは  
なんとしても脱出してくれ」  
と、としさんを無理に説得し、  
同僚の女の人たちと佐渡開拓  
団を脱出させた。

この攻撃で、開拓団一四六  
四人(女子供を含む)が戦死  
または自決。生き残った者も  
ほとんどが負傷し、団はまさ  
に壊滅の状態になった。  
注：自決の中には、親に殺さ  
れた子供、子供を殺して自分  
も自殺した親も含まれる。



山際さん一家のたどった経路  
左) 満洲全図 上) 左図のワク内を拡大したも  
の。矢印のような経路で山際さん一家は逃げた。

うことで、だれの顔も真剣に  
なつていた。  
注：大雨の中で一行が一夜を  
過ごしたのは、完達嶺山脈で、  
標高二百〜三百メートルくら  
いの丘のような低い山なみか  
連なっている所だった。  
宝清で襲撃を受ける  
夕方、清和の牛馬車隊は東

横林開拓団のある宝清街近く  
にさしかかった。  
あたりの道路の両側には、  
行季や着物、カバンから位牌  
までが捨てられていた。ここ  
で、他の地から宝清を目指し  
て歩いてきたという軍服の人  
や幾組かの子供連れの女の  
たちといつしよになつた。

執筆・宮田栄門 取材協力  
山際としさん(木場上組)